

露木孝彦助教授を送る

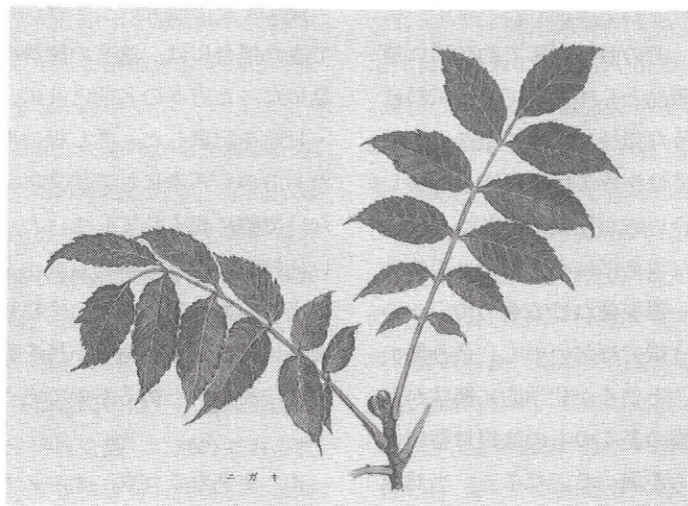
岩村 秀 (化学教室)

露木助教授は、昭和4年11月9日のお生まれで、本年3月限りで本学の停年を迎えられます。先生は昭和29年3月本学部化学科を御卒業になり、引き続き大学院化学系研究科化学専門課程に進まれ、昭和34年理学博士の学位を取得されました。同年12月より、教養学部化学教室の助手となられ、4年後に講師として理学部化学教室に戻ってこられ、昭和43年に助教授に昇任され、今日まで化学教室で研究と教育に携わってこられました。この間昭和45年から翌年にかけて約1年間、米国ブランダイス大学に Senior Research Associate として出張されております。

露木先生の御研究は、島村修先生(本学名誉教授)の研究室での学位論文のお仕事「異常マイケ

ル付加反応機構の研究”に始ります。まだ我が国では殆ど使われていなかった早い時期に、放射性同位体 ^{14}C を含む標識化学物を合成し、反応に用い、その所在を分析する手法を使い、極めて明確な結論を得ておられます。勿論、第五福龍丸事件の余韻覚めやらぬ頃で、大学のRI 総合センターもRI 研究室もなかったころの話です。放射性同位体使用のマークの付いたRI 実験室は、当時なぜかゴジラ部屋と呼ばれ、そこに出入りのできる先生、大学院生はちょっと偉く見えたものでした。

大学院修了後は、有機反応化学から天然物化学に漸次研究テーマをシフトされ、教養学部ではカメムシの臭気成分の研究を行われましたが、これもフェロモンの研究が今日ほど流行し始めるだい



露木先生がお画きになったニガキのスケッチ

ぶ前のことでした。

理学部に戻って来られてからは、新設の天然物有機化学講座の高橋武美教授を助け、トリテルペンの骨格転位反応の研究、フリーデリンの光化学反応を手掛けられ、ニガキ科植物の苦味成分の単離、構造決定と言うライフワークを完成されました。このお仕事は、“ニガキ科植物の苦味成分の研究”という著書となり修学館より出版されております（155ページ、1989年12月）。拝読しますと、有機化学の原点である天然物有機化学をこよなく愛しておられたことが分かります。

この本では、表紙のカバーや各章のはじめに色刷りの見事な植物の絵が載っています。カラー写

真と見紛うほどですが、これは露木先生御自身のお画きになったものであると伺いました。その道の専門的スケッチやデッサンをおやりになります。ヴァイオリンもたしなまれますが、ついぞ聞かせて頂く機会を得ませんでした。

理学部および化学教室では、入試関係の委員等実務を伴う役目で、私共は大変お世話になりました。日本化学会では、理事および各誌編集委員として御活躍になっております。

4月1日付けで埼玉大学教育学部教授にと言う割愛願いが来ております。新しい任地での御活躍御発展をお祈り致しますとともに、還暦を迎えられたことをお忘れなく、何卒御自愛下さい。